

## 環状移動を表すタイ語動詞 *won* の語彙相\*

高橋 清子

神田外語大学

### 1. はじめに

私には2人の言語学の恩師がいる。大学院生時代に学問のみならずあらゆる面において面倒を見てくださった Kingkarn Thepkanjana 教授と、博士論文の審査委員を引き受けてくださって以来、私の拙い論考や発表内容に対しあきれ顔を見せることなく常にピシッと要点を押さえた明晰なコメントを返して下さっている松本曜教授である。おふたりの個性は違うが、おふたりに共通しているのは常日頃の態度や行動が研究者の模範を体現されている点である。松本先生にはつい先日も、何度も書き直した拙稿 (Takahashi (to appear)) を読んでいただいた。超人的なお忙しさにも拘らず、書き直すたびごとに丁寧に読んでくださり、加筆すべきところや再考すべきところを的確に指摘して下さる。思い起こせば、これまで学位論文の入手方法からエクセルの使い方やスクリーンショットの仕方まで様々なことを教えてくださった。私の求めに応じて動詞連続構文に関する御自身の文献コレクションをわざわざ送ってくださったこともある。感謝に堪えない。知識が浅く頭の働きが鈍い私は、申し訳ないことに、松本先生からいただいたコメントの趣旨を即座に理解できないことがある。数日後あるいは数週間後、ときには数ヶ月経ってから思い出して「そういうことだったのか」と気付く。しかし本稿の執筆を動機付けたのは、そうしたいつもの気付きとは異なる種類の気付きであった。松本先生から指摘を受けたときには「なるほど」と納得できたのに、その後しばらくして「本当にそうだろうか」と疑問が湧いたのである。その松本先生の指摘とは、継続的な移動事象を表すタイ語動詞の下位分類——それまで私はいわば直感的に *won* ‘circle’, *taam* ‘follow’, *lɔː* ‘move along, skirt’, *liap* ‘move along, skirt, hug’ といった動詞を達成相の動詞として分類していたのだが——その分類に関して呈された次のよ

---

\* 本研究は科研費の助成を受けた研究（基盤研究(B)15H03206「移動表現による言語類型論：実験的統一課題による通言語的研究」研究代表者：松本曜）および国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪菌晴夫）傘下のサブプロジェクト「動詞の意味構造」（リーダー：松本曜）の成果の一部である。當野能之氏には草稿を読んでいただき内容改善に役立つ多数のコメントをいただいた。感謝申し上げる。残る不備や誤りは筆者の責任である。

うな疑問である。「これらの動詞は、終結点のある (telic な) 事象を表すのではなく、終結点のない (atelic な) 事象を表すのではないか」。Vendler (1967) の用語を使って言い換えれば、「これらの動詞の語彙相は達成相 (accomplishment) ではなく活動相 (activity) ではないのか」。

本稿の目的は次の 3 つにまとめられる。第 1 に、円を描いてまわる環状移動を表す動詞 *won* の実際の使用例を調査し、様態動詞として使われているのか経路動詞として使われているのかを明らかにする。第 2 に、*won* の語彙相は活動相なのか達成相なのかを明らかにする。第 3 に、「様態動詞と経路動詞は語彙相によって区別できる」という高橋(2017: 138-141)の考えの妥当性を検証する。

タイ語の自発的回転移動事象 (まわる事象) を表す動詞 (*won* を含む) の意味の弁別素性や意味拡張の様相については、過去にタイ国立電子コンピュータ技術研究センターが所有する電子コーパスを利用して考察したことがある(第 2 節)。本稿の分析には、NINJAL-Kobe Project on Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL)の一環として実施したビデオ実験 C (タイ語版) から得られた発話データとインターネット上に公開されているタイ語の大規模電子コーパス TNC: Thai National Corpus (Third Edition)から収集した用例データを利用する。実験発話データを用いて *won* の様態動詞としての可能性について検討し(第 3 節)、コーパス用例データを用いて *won* の語彙相 (活動相か達成相か) と動詞タイプの帰属 (様態動詞か経路動詞か) について分析を試みる(第 4 節)。それらの分析結果をもとにタイ語移動動詞の分類について議論を深める(第 5 節)。<sup>1</sup>

## 2. 自発的回転移動を表す 3 つの動詞の意味

まわる事象を表すタイ語の 3 つの移動動詞——①*won*, ②*wian*, ③*mŭn*——の意味に関する先行研究 (Takahashi (1998), 高橋(2000)) の内容を以下に要約する。

---

<sup>1</sup> 本稿は Takahashi (1998)および高橋(2000)の内容を発展させたものである。バンコクの大学院に在籍していた当時、科学技術開発庁管轄下のタイ国立電子コンピュータ技術研究センターに出向き、コーパス利用許可願を提出して、同センター所有の非公開の電子コーパスから用例データを収集してもらい、それをフロッピーディスクに保存してもらって持ち帰った。一方、本稿の用例データは誰でもいつでもどこでも自由にインターネット上で利用できる電子コーパス TNC <<http://www.arts.chula.ac.th/~ling/tnc3/>>から収集した (検索日: 2019年3月2日)。隔世の感を禁じ得ない。ビデオ実験 C (タイ語版) は 2016年7-8月にバンコクで実施し、タイ語母語話者 43名 (男性 10名, 女性 33名; 13歳~57歳; 平均年齢 29.3歳) が参加した。松本先生を中心とする共同研究に参加させていただき、多数のタイ語話者の発話を収集し分析するという貴重な機会を得た。改めて松本先生に感謝申し上げたい。

1. ① *won* ‘circle, whirl, hover’ は、ある区切られた空間（あるいは何らかの形で範囲を規定できる空間）に存在する連続した物質（風などの気体や水などの液体）の環状移動を意味する（例：回る風＝竜巻，つむじ風；回る淵＝渦巻）. 移動の様態を表す動詞（漕ぐ，飛ぶ，歩くなど）に続くと，輪郭を持つ個体の一定範囲内での環状移動（広い視点から見てある範囲に留まったくるくる円を描いてまわる動き）を表す（例：池の中を漕ぎ回る，首都の上空を旋回する，木の周囲を歩いて回る）. ② *wian* ‘circle, revolve, orbit’ は、単一あるいは複数の参照点によって定まる経路を巡る回転移動を表す（例：土星が巡ってくる，様々な都市を巡る）. 太陽を巡る惑星の軌道のように 1 つの参照点を中心とする円周型経路であってもよいし，多くの場所を経由して元の場所に戻る回覧板の回覧ルートのようにいくつかの参照点を巡る鎖輪型経路であってもよい. 移動の様態を表す動詞に続く場合，その移動の経路が何かを参照点とした円を描くことを表す（例：ハチが飛び回り花のしべにたわむれる）. ③ *mũn* ‘turn, revolve, spin, rotate, whirl, circulate, wheel’ は，ある有機的組織体が総体的に回転すること，つまり個体の軸を中心とした連続回転を表す（例：地球が自転する，弾丸がくるくるとらせん状に回転する）. これら 3 つの動詞の意味には「①制限空間」「②限定経路」「③有機的組織体の総体的回転」という図式的な空間概念がそれぞれ関わっている. タイ語話者はこれらを弁別素性として自発的回転移動事象を 3 つに分類している.
2. ① *won* と ② *wian* は自発的な回転移動しか表せないが，③ *mũn* は外力によって引き起こされた使役的な回転移動も表せる. 初めから終わりまで力を加え続けなければならない使役的回転移動（例：調整つまみを回す）も，一度だけ力を加えて後は惰性に任せる使役的回転移動（例：独楽を回す）も，両方表すことができるが，後者の場合，他の使役的回転移動動詞（*pàn* 回す）が使われることが多い. また① *won* と ② *wian* は様態を表す移動動詞の後ろに生起してその移動の経路を特定するが，③ *mũn* にはそうした機能がない. ③ *mũn* が表す回転移動は自らの軸を中心としてその場で回転する位置が固定された動きである. ③ *mũn* は移動の経路よりむしろ移動の様態を前景化する動詞である.
3. 3 つの動詞のいずれか 2 つが組み合わせられて複合動詞を形成するとき，次のいずれかの組み合わせになる. ①② *won wian*, ②① *wian won*, ③① *mũn won*, ③② *mũn wian*. アスタリスク\*をつけた次の組み合わせは Bradley

(1873)に記載があるものの現代タイ語では使用されていない。\*①③ *won mǔn*, \*②③ *wian mǔn*. つまり, ③ *mǔn* が① *won* あるいは② *wian* と組み合わせられるときは必ず③ *mǔn* が先行する, そして① *won* と② *wian* が組み合わせられるときはそのどちらが先行してもかまわない, ということである。タイ語では移動の様態を表す動詞と移動の経路を表す動詞は「様態動詞＋経路動詞」の順に生起する。③ *mǔn* はより様態動詞に近く, ① *won* と② *wian* はより経路動詞に近い。

4. それぞれの動詞の原型的意味(空間移動の意味)に内包された「①制限空間」「②限定経路」「③有機的組織体の総体的回転」という図式的空間概念が意味拡張を動機付け, それぞれに特徴的な抽象的意味を成立させている。① *won* は「仕事が堂々巡りではかどらない」「混乱と暗愚をさまよっている」などの心理的表現に使われる。これらは「限られた仕事の範囲」「限られた興味の範囲」を「制限空間」に見立てた比喩表現である。② *wian* は「輪廻転生する」「めまいがする」「各家が持ち回りで務める」などの時間的, 心理的, 社会的表現に使われる。これらは「この世とあの世を巡る人生のサイクル」「ぐるぐる回っているように見える自分の頭を中心とする空間」「各家庭を結ぶきずな」を「限定経路」に見立てた比喩表現である。③ *mǔn* は「混乱する(頭が回る)」「融資する(金が循環する)」などの心理的, 社会的表現に使われる。これらは「混乱(有機的組織体である頭の回転)」「融資(有機的組織体である金融ネットワーク内のお金の回転)」を「有機的組織体の総体的回転」に見立てた比喩表現である。同時に, 心理的活動(混乱), 社会的活動(融資)をその活動の具体的で顕著な構成要素(混乱している人の頭, 融資に使われるお金)に言及することによって表現する換喩表現でもある。

これら4点は, 今回の TNC コーパスを使った用例調査によっても誤りはないことが裏付けられた。<sup>2</sup> 先行研究では語彙相に言及していないので, 以下, 補足する。自転事象を表す様態動詞 *mǔn* の語彙相は活動相であり, 巡回事象を表す経路動詞 *wian* の語彙相は達成相である。Takahashi (to appear, §3.1)が指摘するように, *mǔn* のように本来的に明確な区切り(起点や着点)がない事象を表す活動相動詞は完了相標識 *léew* が添えられたとき「～し始めた」という起

<sup>2</sup> TNC コーパスに含まれていたトークン数は *won* が 1337, *wian* が 1538, *mǔn* が 2007 であった。まず *won*, *wian*, *mǔn* の使用例を 100 トークンずつ無作為に抽出し, それら 3 語の大まかな使用傾向を確認した後, それぞれの語の左隣と右隣に生起している語を調べ, 特にトークン数が多い語との共起例に注目し分析を行った。

動 (inceptive) の解釈と「～し終えた」という完遂 (completive) の解釈の両方が可能である (*mũn léew* 「自転が始まった」「すでに自転を終えた」). 一方, *wian* のように明確な着点がある事象を表す達成相動詞は「～し終えた」という完遂の解釈だけが可能である (*wian léew* 「すでに巡回を終えた」). では, 気体や液体が渦を巻いてまわる事象 (典型的には様態動詞が表す事象) も, 個体が円を描いてまわる事象 (典型的には経路動詞が表す事象) も, どちらも表し得る *won* の基本的な語彙相は活動相だろうか達成相だろうか. *won léew* は「環状移動が始まった」と「すでに環状移動を終えた」のどちらの解釈が優勢なのか. これらの疑問に答えるため, 次節以降, 経験的データ (ビデオ実験から得られた発話データと大規模コーパスから収集した用例データ) を利用し, 実際の言語使用を詳しく分析する.

### 3. ビデオ実験の発話データ

ビデオ実験 C の全 44 種類のビデオ映像 (人間や犬や猫やボールが様々な経路をたどって移動する場面) の中には 2 種類の環状移動の場面——(a)男性が木の周りを数回ぐるぐる歩いて移動する場面と (b)同じ人物が同じ経路を走って移動する場面——が含まれている. それらの場面を描写した被験者の発話の主要例を以下に列挙する. それぞれの例文が代表する構文パターン (動詞句および前置詞句の配列パターン) の使用頻度 (その構文パターンを使った被験者の数) を全体訳の後ろに鍵括弧で示す. たとえば, (1a)の [16]は「全被験者 43 人中, 16 人の発話で(1a)の構文パターンが使われた」ことを意味する.

- (1) a. (*phũu chaaj*) *dəən* *rɔɔp* *tôn máj*  
 (男) 歩く ～の周り 木  
 ((男が)木の周りに沿って歩く) [16]
- b. (*phũu chaaj*) *wĩŋ* *rɔɔp* *tôn máj*  
 (男) 走る ～の周り 木  
 ((男が)木の周りに沿って走る) [25]
- (2) a. (*phũu chaaj*) *dəən* *won* *rɔɔp* *tôn máj*  
 (男) 歩く 回る ～の周り 木  
 ((男が)木の周りに沿って歩いて回る) [15]
- b. (*phũu chaaj*) *wĩŋ* *won* *rɔɔp* *tôn máj*  
 (男) 走る 回る ～の周り 木  
 ((男が)木の周りに沿って走って回る) [14]

- (3) a. (phûu chaaj) dæən won (tôn máj)  
 (男) 歩く 回る (木)  
 ((男が)歩いて(木を)回る) [6]
- b. (phûu chaaj) wîŋ won (tôn máj)  
 (男) 走る 回る (木)  
 ((男が)走って(木を)回る) [4]
- (4) a. (phûu chaaj) dæən won paj rɔɔp tôn máj  
 (男) 歩く 回る 行く ~の周り 木  
 ((男が)木の周りに沿って歩いて回っていく) [1]
- b. (phûu chaaj) wîŋ won paj rɔɔp tôn máj  
 (男) 走る 回る 行く ~の周り 木  
 ((男が)木の周りに沿って走って回っていく) [1]

これらの例文から次の3つのことが分かる。第1に、様態動詞 (*dæən* 歩く, *wîŋ* 走る) を使わず *won* だけを使った被験者はいなかった。第2に、最も使用頻度が高かった構文パターン(1)には *won* が含まれていない。第3に、経路参照物を表す名詞句 (*tôn máj* 木) は、動詞 *won* に後続して動詞句の構成素になっている場合 (構文パターン(3)の「*won tôn máj* 木を回る」) より、前置詞に後続して前置詞句の構成素になっている場合 (構文パターン(1)(2)(4)の「*rɔɔp tôn máj* 木の周り (に沿って)」) のほうが多い。

ビデオ実験の発話データは次のようなことを示唆する。*won* は、人間が木の周りをぐるぐると回るといった環状移動の描写には単独で使われることがなく、様態動詞と組み合わせられた形で使われる。個体が何かの周りをぐるぐる回るといった環状移動の経路は「名詞起源の前置詞 *rɔɔp* + 経路参照物を表す名詞句：~の周り (に沿って)」という前置詞句によって副詞的に表されることのほうが多い。

高橋(2018)の発表が終わった頃、次のような疑問が芽生えた。「構文パターン(2)(3)(4)に含まれている *won* は果たして経路動詞なのだろうか」。(3)に見られるように *won* は経路参照物を表す名詞句 (*tôn máj* 木) を従えることができる。<sup>3</sup> そのため *won* が経路動詞であることは明白だと考える人が多いかもしれない。一般に、経路参照物を表す名詞句を従えることができるのは経路動詞であって、様態動詞ではないからである。しかし実際のところ、タイ語の様態動詞

<sup>3</sup> 従えなくてもよい。前置詞 *rɔɔp* は必ず名詞句 (*tôn máj* 木) を従えるが、*won* は動詞なので名詞句 (*tôn máj* 木) を従えても従えなくてもよい。

は「様態動詞＋経路参照物を表す名詞句」という形をとり得る．典型的な様態動詞「*dəən* 歩く」を例にとれば、「歩く＋[～の上＋道路]」(*dəən bon thanǝn* 道路の上を歩く)も、「歩く＋道路」(*dəən thanǝn* 道路を歩く)も、どちらの形もよく使われている．*won* も「*won tǝn máj* 木を回る」の形をとるからと言って、経路動詞であるとは限らない．「(2)(3)(4)に含まれている *won* はぐるぐる回るといふ移動の様態を前景化する様態動詞ではなかろうか」．遅きに失したこの疑念が本稿執筆の出発点である．

#### 4. 大規模コーパスの用例データ

それでは、*won* が「*dəən* 歩く」や「*wij* 走る」などの様態動詞と組み合わせられることなく使われるときには、*won* はどのような移動事象を表すのだろう．そのとき話者は何に注目しているのだろう．TNC コーパスから様態動詞を伴わない *won* の用例（単独動詞としての使用例、および他の経路動詞や回す手段、回した結果、回す目的などを表す動詞を伴う使用例）を多数拾って分析したところ、以下のことが分かった．

第 1 に、*won* が表す事象は、具象的な個体、液体、気体の物理的空間移動や虚構的空間移動（例(5)-(12), (18)-(21)）であることもあれば、抽象的な物事の時間的、心理的、社会的移動（例(13)-(17)）であることもある．

第 2 に、動物や乗り物などの個体が環状経路をたどって回る事象（例(5)-(7)）を描写するときには、「特定地点に舞い戻る」という経路の特徴を前景化する文脈で使われることが多い．つまり *won* を移動の経路を表す達成相動詞として使うことが多い．

- (5) *ทามา ๕ ปีแล้ว เห็นแต่คนไข้คนเดิมๆ วนกลับมารักษาใหม่*<sup>4</sup>  
（(医療活動を) 5 年間続けているが、再び回って帰ってきて診療を受ける元患者ばかりだ）
- (6) *บางครั้งปลาตัวเดิมอาจวนเข้ามารับการพยาบาลซ้ำ*  
（ときには以前の魚が再び回って戻ってきて（エビによる魚の身体の清掃という）衛生看護の手当を受けることもあるかもしれない）

<sup>4</sup> 前節（第 3 節）のタイ語用例においては、各形態素の意味および形態素同士の統語関係や意味関係を示す必要があった．そのため音声字母で表記して形態素の区切りを明確にし、それぞれの形態素にグロスを添えた．しかし本節（第 4 節）のタイ語用例においては、用例の内容（全体訳）が理解できればそれで十分であり、形態素の意味や形態素同士の統語関係/意味関係の明確化は必須ではないため、そのままタイ文字で表記し、グロスも添えなかった．

- (7) แล้วไมค์ก็เริ่มวนจากหัวแถวฟากซ้ายมาจบลงที่เป้  
(それからマイク (固有名) は (U字型ソファの) 左側の列の端から回り始め, ペー (固有名) のところまできた)

ただし, 個体が環状経路やらせん状経路を回る事象を描写するとき, 「特定地点に舞い戻る」といった経路の特徴ではなく, 「連続的に回り続ける」という様態の特徴のほうが前景化されることもある. つまり *won* を移動の様態を表す活動相動詞として使うこともある. (8)(9)がその例である.

- (8) รถของคณะเราวนไปมาอยู่หลายรอบ ทำให้ได้เห็นตัวเมืองได้มากพอสมควร  
(我々一行の車は何回も (街中を) 回り, かなり街中を見ることができた)
- (9) มีบังค้อนขึ้นไป  
(らせん状にくるくる) 回って上る階段がある)

(9)は, 実際にはその場にいない階段を上る人が想定された虚構移動表現 (高橋(1998)の「潜在的虚構移動」タイプ, Talmy (1996)の「Coverage Path」タイプ, Talmy (2000)の「Coextension Path」タイプ) である.<sup>5</sup> 経路上を移動する移動物を想定することによって経路の特徴を表現する(9)のような虚構移動表現では, *won* は移動の様態を表す活動相動詞として使われる.

第3に, 円形物や回すことが可能な身体部位などの個体が回転軸を中心に回る事象 (例(10)(11)) や, ある域内における液体や気体あるいはその液体や気体の中に混じっている個体が渦を成して回る事象 (例(12)) を描写するときは, 環状あるいはらせん状に「連続的に回り続ける」という様態の特徴を前景化する文脈で使われることが多い. つまり *won* を移動の様態を表す活動相動詞として使うことが多い.

- (10) ในร้านพลังบุญ ขณะรณรงค์มีการเปิดซีดีวนไปมาให้ลูกค้าชิมจับแนวคิดจากประเทศที่งดใช้ถุงพลาสติก  
(パラブン (固有名) 店内では, キャンペーン期間中, プラスチック袋の使用を中止した国々の考え方を顧客に浸透させるために, CD をかけて (CD が) 回る)

<sup>5</sup> あるいは(19)(21)と同じタイプの虚構移動表現かもしれない. 階段自体がくるくるとらせん状に伸び, その結果が残っていると想定することによって階段の形の特徴を表現しているのかもしれない.



- (11) แล้วก็ทำมือวนๆ คล้ายๆ กับจะบอกว่า ไม่เห็นรี  
(それから手をくるくる回るように動かす, まるで「(これが) 見えないのか」とでも言うように)
- (12) เหมือนกลีบดอกไม้ขนาดเล็ที่ถูกลมพัดปลิวว่อนขึ้นวนตามลมหมุน  
(風に吹かれて舞い上がり, つむじ風にのって回, そんな小さな花弁のようだ)

第4に, 思考や感情の堂々巡りといった精神的な繰り返し現象, 政治的な閉塞感や時代の潮流の回帰といった社会的, 時間的な繰り返し現象などを描写する比喩的な *won* の使用例では, そうした抽象的な回転事象を液体や気体の渦巻き移動に見立てている (例(13)(14)). つまり *won* を移動の様態を表す活動相動詞として使っている.

- (13) แต่ก็ไม่เสร็จสักที รู้สึกวนไปวนมา หากุดตั้งต้นไม่ได้ หากทางออกไม่มี  
(しかしちっとも方が付かない, あっちに回こっちに回を繰り返している (堂々巡りをしている) ように感じる, 始まりも出口も見出せない)
- (14) การเมืองไทยยังวนอยู่ที่เดิม  
(タイの政治はまだ元の位置で回続けている (現状から抜け出せず旧態依然としている))

抽象的な回転事象は複合語 (*won wian*, *wian won*, *wók won*, *mǔn won*) で表される傾向が強い (例(15)-(17)).

- (15) เสียงเพลงจากละครที่นักแสดงซ้อมแล้วซ้อมเล่าเวียนวนอยู่ในสมอง [*wian won*]  
(俳優が繰り返し稽古をする芝居の歌声が頭の中で回続けている (頭に残って離れない) )
- (16) พัฒนาการต่อมาของรัฐธรรมนูญสหรัฐฯ ในส่วนที่เกี่ยวกับฐานะและสิทธิเสรีภาพของคนนิโกรก้าวไปอย่างเชื่องช้าและวนวน [*wók won*]  
(これまでのアメリカ憲法の進展は, 黒人の地位と自由権利に関する部分においては, 遅くあちらこちらに回っている (紆余曲折して進んでいない) )
- (17) เป็นเหตุให้ต้องกลับมาเวียนว่าคายเกิดอยู่ในสังสารวัฏหมุนวนอยู่อย่างนี้ [*mǔn won*]  
( (煩惱, 欲, 執着が) このように (あの世とこの世を) 回っている

輪廻転生の中で死んでは生まれ死んでは生まれを繰り返さざるを得ない原因だ)

第5に、*won* を構成素として含む複合動詞が、抽象的な回転事象ではなく、具象的な物理的回転事象あるいは虚構的回転事象を表す場合もある。その場合、それらの複合語は「連続的に回り続ける」という様態の特徴を前景化する文脈で使われることもあれば(例(18)(19))、「特定地点に舞い戻る」という経路の特徴を前景化する文脈で使われることもある(例(20)(21))。つまり *won* を移動の様態を表す活動相動詞として使うこともあれば、移動の経路を表す達成相動詞として使うこともある。

- (18) มีดาวระอิบระยับ หมุนวนไปมา [*mŭn won*]  
(きらきらと光って回っている星がある)
- (19) แคบลงกว่าเดิม แล้ววกวนไปมาเหมือนถนนบนเขาพับผ้า [*wók won*]  
( (道が) これまでより狭くなり、つづら折れの山道のようにあちらこちらに回っている (曲がりくねって蛇行する) )
- (20) คนไข้หน้าเก่าที่วนเวียนกลับมารักษารอบแล้วรอบเล่า [*won wian*]  
(馴染みの患者が何度も何度も回って戻ってきて受診する)
- (21) วงกลมก็ถือการหมุนวนมาเจอกันที่จุดเดิม [*mŭn won*]  
(円とはすなわち、回って元の点に戻ることだ)

(19)(21)は、実際には動かない物体の動きが想定された虚構移動表現(高橋(1998)の「虚構移動結果」タイプ, Talmy(1996), (2000)の「Advent Path」タイプ)である。(19)では道の曲がりくねる動き(活動相の動き)が想定され、(21)では円周の線の先端が伸びて円を描き元の位置に戻る動き(達成相の動き)が想定されている。ある物体が過去に動いたこと、そしてその動いた結果が残っていることを想定してその物体の形の特徴を表現する(19)(21)のような虚構移動表現では、*won* は移動の様態を表す活動相動詞として使われることもあれば、移動の経路を表す達成相動詞として使われることもある。

以上の分析結果を要約すると、次のようにまとめられる。移動動詞 *won* は様態動詞(活動相動詞)としても経路動詞(達成相動詞)としても使われる。様態動詞としての典型的な使い方は液体や気体がぐるぐると渦巻く移動表現の中に見られる。経路動詞としての典型的な使い方は個体が特定地点に舞い戻ってくる移動表現の中に見られる。

完了相標識を伴った *won* (*tôn máj*) *léew* のアスペクト解釈については、次のように説明できる。もしくるくる回る移動の様態を前景化する表現なのであれば、「(木を)回り始めた(起動)」と「すでに(木を)回り終えた(完遂)」の両方の解釈が可能である。もし1回くるりと回って元に戻る移動の経路を前景化する表現なのであれば、「すでに(木を)回り終えた(完遂)」の解釈だけが可能である。

ビデオ実験 C に含まれる「男性が木の周りをぐるぐる回る」という映像の環状移動の経路は、*won* が表す個体の環状移動の経路の典型的特徴(特定地点に舞い戻る)には合致しない。したがって、ビデオ実験の発話データに含まれていた *won* は、経路動詞としてではなく、ぐるぐる回るという移動の様態を表す様態動詞として使われた、と見るべきであろう。ビデオ映像の男性の移動の様態に2つの側面(歩く/走ると同時にぐるぐる回る)を見出し、2つの様態動詞を使ってそれらを丁寧に描写した被験者がいたのである。歩く場面では、1つの様態動詞(*dəən* 歩く)しか使わなかった人(16人)より2つの様態動詞(*dəən* 歩く, *won* 回る)を使った人(22人)のほうが多かった。走る場面では、半数以上の人(25人)が1つの様態動詞(*wiŋ* 走る)しか使わなかったが、2つの様態動詞(*wiŋ* 走る, *won* 回る)を使った人(20人)も少なくはなかった。

もし鳥瞰図のように上から眺める視点にビデオカメラを据え、ある人がある特定の地点から再びその地点に舞い戻ってくる環状移動を映像化し、それをタイ語話者に見せて描写させたなら、その経路を *won* によって表現する人が出てくるかもしれない。

## 5. 様態動詞と経路動詞の区別

*won* のように様態動詞(活動相動詞)としても経路動詞(達成相動詞)としても機能する動詞があるという考えは、タイ語の様態動詞と経路動詞は語彙相によって区別できる——様態動詞は活動相動詞であり、経路動詞は非活動相動詞(達成相動詞, 到達相動詞)である<sup>6</sup>——という考えと矛盾しないのか、と問われれば、私は次のように明快に答える。両者の考えは矛盾しない、両者の考えは両立する。

タイ語の形態素(語)はその多くが複数の意味機能を有している。つまり多義語や多機能語である。複数の実質の意味を持っていたり、複数の機能的意味

---

<sup>6</sup> 逆から言えば、タイ語には(固有の語彙相を持たず統語環境や談話文脈などによって異なる語彙相の解釈を許す直示動詞 *paj* 'go', *maa* 'come' を除き)「境界を越えない経路、起点や着点などの区切りがない経路」を表す移動動詞(活動相の経路動詞)や「始まりや終わりのある様態」を表す移動動詞(達成相や到達相の様態動詞)は存在しない (cf. 高橋(2017), Takahashi (to appear)).

を持っていたり、実質的意味と機能的意味の両方を持っていたりする。たとえば、実質的意味と機能的意味の両方を持つ形態素があるからと言って、それを根拠にタイ語には実質語と機能語の区別がないと考えることはできない。そのような考え方に合理性はない。当然のことながらタイ語でも他言語と同様、実質語と機能語は区別できる。ただタイ語には両方の機能を持つハイブリッド形態素があるというだけの話である。

*won* の多義性については、次のように説明できる。タイ語の移動動詞には（活動相動詞の）様態動詞と（達成相動詞/到達相動詞の）経路動詞の区別があり、多くはそのどちらかに属する。しかし中にはそのどちらにも属し、様態動詞としても経路動詞としても機能し得る動詞がある。*won* はそのようなハイブリッド動詞である。

## 6. おわりに

本稿では、環状移動を表す動詞 *won* の使用例を多数収集し、その経験的データをもとに、*won* は様態動詞（活動相動詞）としても経路動詞（達成相動詞）としても機能することを明らかにした。松本先生から指摘を受ける前の見方（*won* を「1回だけ回る事象の経路を表す達成相動詞」に分類すること）と指摘を受けてからの見方（*won* を「連続して回る事象の様態を表す活動相動詞」に分類すること）は、そのどちらかが正しくどちらかが誤っているというわけではなく、そのどちらにも妥当性がある、ということが分かった。松本先生からいただいた指摘によって見方が偏っていたことに気付くことができた。

*won* の使い方は、移動物はどのような属性や性質を持っているのか、経路にはどのような特徴があるのかといった意味論的要素や、話者はどのような事象参加者に注目しているのか、どのような発話意図を持っているのかといった語用論的要素によって、異なる。移動の様態を前景化する動詞（活動相動詞）として使われることもあれば、移動の経路を前景化する動詞（達成相動詞）として使われることもある、そのような *won* に似た動詞は他にもあるかもしれない。たとえば、何かに従って動くことを表す動詞（*taam* ‘follow’, *lɔʔ* ‘move along, skirt’, *lɪap* ‘move along, skirt, hug’）にも、「何かを追い続ける」という移動の様態に焦点を当てたり、「何かに沿ってある地点からある地点に移る」という移動の経路に焦点を当てたり、意味の焦点が異なる複数の使い方があるかもしれない。実際の使用例を多数収集して調査する価値がある。今後の課題としたい。

### 参考文献

- Bradley, Dan Beach (1873) *Dictionary of the Siamese Language*, 828 pages, Bangkok. [reprinted by American Missionary Association Press in 1971].
- Takahashi, Kiyoko (1998) How to Turn Round: Thai Verbs of Motion in a Circle, Oral presentation at *International Seminar on Current Issues in (Cognitive) Lexical Semantics*, Thammasat University, Bangkok, September 10–11, 1998.
- 高橋清子(1998)「タイ語の虚構移動結果表現（出現経路）と潜在的虚構移動表現（範囲占有経路）の機能と意味的制約」『日本言語学会第116回大会（慶應義塾大学，東京，1998年6月20-21日）予稿集』, 136-141.
- 高橋清子(2000)「回転移動を表す移動動詞について」『国際交流基金バンコック日本語センター』第3号, 33-38.
- 高橋清子(2017)「タイ語の移動表現」『移動表現の類型論』, 松本曜(編), 129-158, くろしお出版, 東京.
- 高橋清子(2018)「タイ語移動表現の経路表示」ワークショップ“移動経路の種類とそのコード化：通言語的ビデオ実験と移動表現の類型論再考”（召集者：松本曜，日本言語学会第157回大会，京都大学，京都，2018年11月17-18日）での口頭発表.
- Takahashi, Kiyoko (to appear) “Syntactic and Semantic Structures of Thai Motion Expressions,” *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, ed. by Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, John Benjamins, Amsterdam.
- Talmy, Leonard (1996) “Fictive Motion in Language and “Ception”,” *Language and Space*, ed. by Paul Bloom et al., 211-276, MIT Press, Cambridge.
- Talmy, Leonard (2000) “Chapter 2: Fictive Motion in Language and “Ception”,” *Toward a Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring Systems*, 99-175, MIT Press, Cambridge.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, NY.